

山形県俳人協会報

令和二年の非常事態



鈴木 正子

令和二年もわくわくとして迎えた筈でしたが、誰もがこんな時世を想像することが出来たでしょうか。
日々新型コロナウイルスの報道に明け暮れ、先の見えない恐怖におののきながら不安な時間を過ごすことになってしまいました。

新年度を迎え、さまざまな事業計画が目前に迫ってきており、県俳人協会では、四月十九日の通常総会開催の手筈を整えておりましたが、新型コロナウイルスの観点から幹事会を取りやめ、三月末に三役・合同会議を開催、通常総会は書面表決とさせていただくことに決定いたしました。今年で創立四十二年を迎えますが、初めての中止は驚愕の極みです。早急に会員へは書面の表決書を送り、賛否伺いをお願いしました所、過半数以上の返信があり、規約第八条により、全ての議事が可決承認となりました事をこの場を借りて、ご報告を申し上げますと共に会員の皆様のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

なお、卒寿賀詞、協会賞準賞、第一回二十句競詠賞の受賞者の方々には逢うことは叶いませんでしたが、改めましてお祝いを申し上げたいと思います。
コロナ防止の情勢におき、これまでにない緊急決断に戸惑

第 83 号
令和 2. 6. 20

山形県俳人協会

〒九九四-〇〇二二 天童市久野本四-十一-十一

伊藤 寛方

〇二三-六五四-〇二五八

いもありませんが、皆様の命を守るためには最善の策ではと
思っています。やはり、「地球が健康でなければ人間は健康に
ならない」、「人間が健康でなければ地球も健康にならない」
と言う言葉が身に沁みました。ウイルスにかからないために
も日頃から免疫力を整えることが大事だと言うことでしょう。
先日までは、多くの俳句会に顔を出し楽しんでいたことが
何もかも中止。家に籠ることが多く、次々と紙上俳句の投句
が届くたび、緊張感を呼び戻され、早く皆と逢いたいと思っ
つつ不安を抱えていました。こんな時こそ、自分の時間を有
効に俳句を詠むことにより、心安らぐ気がいたします。

令和二年（二〇二〇年）と言う年が、新型コロナウイルスの感染防
止を抜きにしては語られることがないのでは……しかし句材
も例えば、無観客の相撲や野球、人気のない街の様子、マス
ク着用の暮しなど、事実であつても詩になるのだろうかと思
問を感じた人も多かったのだと思います。数年後には意味が
通じなくなり、危惧して避けることになるかも知れませんが、
俳人は今の非常事態を書き留めることも自然だと思ふのです。
この度は、何と思いがけない決断に迫られることの多かつ
たことか、どんなリーダーでもうまく行って当たり前、失敗
すれば批判され、最善はないのに、最悪だけが有り得ると言
う恐さです。仕方のないことかも知れませんが、決断の大切
は、「無私 of 精神」と言うことを学びました。当分は推移を見
守りながら、新年度の企画を臨機応変に、やれることから全
力を尽くして実施して参りたいと思っております。
まだまだ予断は許されませんが、お互いに健康第一に過ご
され、ご健吟を祈るばかりです。

第四十二回山形県新春俳句大会

とき 令和二年二月十六日(日)
ところ 山形市保健センター

入選作品

松浦 俊介 選

特選

雪女郎うすうすと月ありにけり

鶴岡市 齋藤 峯男

秀逸

ストーブの廊下に燃ゆる湯宿かな

鶴岡市 池田 栄

快晴に飛ぶや一縷の雪迎へ

白鷹町 山口 恵子

鳥海山の肩より昇る初日の出

酒田市 加藤 悟

力石にちよつと降り来し初雀

山形市 折原 廣子

拾うたる命眩しき初日かな

村山市 柴田美智子

佳作

旅はじめ機窓に大き冬の虹

山形市 井上多桂子

赤ちやうちん屋台に小さき団子花

山形市 渡辺 幸則

寒晴や鳶大らかに輪を広ぐ

山形市 横道輝久子

在りし日のままの文机石蔭の花

南陽市 佐藤 正代

街なかに托鉢の鈴冬の月

鮭川村 小川 庭水

杉山に日矢いく筋も初景色

東根市 大江 洋子

風花や格子の中の阿修羅像

鶴岡市 齋藤 峯男

三色の祝賀放水出初式

山形市 井上多桂子

最上川船見番所の冬ざるる

鶴岡市 栗原 愛子

蔵王嶺を金色に染め初日の出

山形市 石黒 節子

阿部 月山子 選

特選

海境に広がる佐渡の冬夕焼

鶴岡市 小玉 フミ

秀逸

観音に響く手締めや達磨市

鶴岡市 本間 まり

鼠ヶ関印の賑はひ嫁が君

鶴岡市 小玉 フミ

緋衣の貫主の読経餅搗けり

鶴岡市 栗原 愛子

室生寺の百の階初霰

東根市 門脇 好子

佳作

冬風の島へひと筋朱き橋

山形市 井上多佳子

佳作

諦めも生きる術なり初詣

村山市 柴田美智子

小春日や色を違ふる三方五湖

山形市 井上多佳子

末社裏ふいに鶯の急降下

鶴岡市 佐藤 栄美

初詣鉦彫粗き仏かな

東根市 斎藤耕次郎

大且息静なる白竜湖

山形市 青木 力

あまはげの里は雑魚干す日和かな

鶴岡市 佐藤 照子

鮎焼く油の垂るる竹の串

山形市 齋藤 真人

鳥海山の肩より昇る初日の出

酒田市 加藤 悟

波尖り冬のサーファー見え隠れ

鶴岡市 本間 まり

三色の祝賀放水出初式

山形市 井上多佳子

鳥追の唄の掠れる村外れ

山形市 鈴木 周子

鈴木正子選

特選

櫛や胡坐に赤子抱く白寿

鶴岡市 木村 慶子

特選

黒坂重政選

寒垢離の湯気をまとひて仁王立ち

米沢市 小島 緑泉

秀逸

鳥海の風強き日や磯菜摘む

山形市 金谷ゆかり

草々の水茎清し初便

山形市 遠藤 祥

丹丹に喜寿の気合や初鏡

東根市 阿部小夜子

遺されし父愛用の輪櫛

山形市 横道輝久子

秀逸

ふるさとへ成人の日の大志告ぐ

東根市 阿部美和子

息止めることより学ぶ筆始

南陽市 渡部 次代

古稀迎へ論語知らずや寒卵

山形市 堀川 栄助

初市や暫し昭和の風の中

山形市 石井 浩吉

佳作

農継がぬ子も帰り来て餅をつく
山形市 佐々木次雄

なまはげの去りし座敷の泣き笑ひ
山形市 栗原ただし

月山の黒雲分けて初茜
鶴岡市 齋藤キミ子

初旅の切符飛び出す改札機
山形市 大井田千代子

はらからの母似父似や年酒酌む
山形市 木嶋 玲子

教材の針箱今も縫始
東根市 阿部美和子

鳥海山の肩より昇る初日の出
酒田市 加藤 悟

卒寿まで尽きぬ意欲や初日記
山形市 清野佐知子

まほろばの民話の里や機始
天童市 高橋喜恵子

松過ぎて元のひとりになりにけり
山形市 高橋たけ子

改札を抜けてマスクの街に散る
山形市 鈴木 周子

伊藤 寛 選

特選

どんがら汁椀にあふるる寒梅忌
鶴岡市 木村 慶子

秀逸

年用意電子辞書にも乾電池
山形市 長谷川陽子

故郷を旅の地となし雑煮餅
埼玉県 増田 信雄

隙間より片目で覗き福袋
山形市 松田 恵子

鳥海の風強き日や磯菜摘む
山形市 金谷ゆかり

佳作

毛糸編む十指衰へなき媪
西川町 板坂 歩牛

旅はじめ機窓に大き冬の虹
山形市 井上多桂子

御社の長き階初松籟
山形市 志鎌恵美子

加湿器や赤子よく寝る昼下がり
白鷹町 小林香代子

鮎焼く油の垂るる竹の串
山形市 齋藤 真人

在りし日のままの文机石路の花
南陽市 佐藤 正代

父母のとうに亡き里冬銀河
米沢市 猪俣 洋子

杉山に日矢いく筋も初景色
東根市 大江 洋子

初市や暫し昭和の風の中
山市 石井 浩吉

香煙を前頭葉に小春風
鶴岡市 三浦 茂子

新聞のコラム音読春障子
白鷹町 東海林朝子

当日句 席題 「雨水」

金子つとむ 特選

葱畑の黒土匂ふ雨水かな
山形市 伊藤 ふみ

外国語聞こゆる駅の雨水かな
山形市 小関 恵子

雨水かな女が薄き翅たたむ
新庄市 柏崎 寿宣

新春大会記

第四十二回山形県新春俳句大会が二月十六日、霞城センター三階山形市保健センターで開催された。参加者は昨年を上回る六十九名、事前投句数は六〇二句。

十時三十分の受付開始と同時に、席題「雨水」が発表され、それぞれ席題を胸に作句と推敲、投句数は六十一句であった。

十三時に大会は開会。黒坂重政副会長の開会の言葉、鈴木正子会長の挨拶の後、選者の紹介、事前句の各選者特選一句、秀逸五句の入選発表と講評が行われた。各選者は入選句の講評にあたり、句の焦点を絞る、場面が鮮やかに表現されている、ユーモアがある、ギャップがある、それぞれ選考理由を述べられた。

続いて本日の席題「雨水」の入選句の発表と講評。選者より、季語の意味と説明があった。参加者は出席しないと聞く事が出れない作句のポイント等、とても有意義な時間を過ごした。

選者染筆の抽選会では、会場も大いに盛り上がり、十四時十五分に閉会した。

その後に行われた懇親会は、十五時より紅花楼にて開催、終始和やかななか、十七時に散会となった。

(鈴木 実記)



令和元年度 山形県俳人協会賞 準賞 句集『亀ヶ崎にて』八柳 悦子

山形県俳人協会賞選考経過について

選考委員長 黒坂重政

県俳人協会賞の選考委員会は、三月十一日に山形市のまなび館で、黒坂重政、伊藤寛、工藤稲邨、岸さなえ、伊藤ふみ、各委員の五名が出席し、鈴木正子会長の同席を得て開催された。

対象となる句集は、令和元年度に出版された県俳人協会会員の個人句集である。選考方法は昨年度同様に、事前に各委員に依頼している三冊の句集の読み込みと、合議後に判定のための参考とするため、数項目の選考基準による資料等をもとに、全員協議の形で進めてきた次第である。

今回は、句集『亀ヶ崎にて』八柳悦子・『淡雪』川村耕泉・『小さき歩』山野井よし子各氏の三冊で、各委員からは、順次に一冊ずつの作品の全体的な感想を述べ合い、忌憚のない意見が交わされた。

三人の著者は、八十年代一名、七十年代が二名と、正に人生と俳歴の歩みも豊かに長く、ベテランの方々である。

どなたでも、句集の上梓は著者の人生と俳句道の集大成であり、また自分史でもある。三冊の句集とも大方は境涯俳句であるが、著者の人生観と俳句理念を想起させる三者三様の味わいがあった。

次に、各句集の印象に残った作品を抄出する。

◎八柳悦子氏『亀ヶ崎にて』 酒田の歴史を今に伝えて、「亀ヶ崎」という地区名を句集名にしたユニークさ。庄内の風土に生の証を探り、自然と共に、平明ながら優しく温かな感性で詠み上げた作品群は、気負いなく好感が持てる。

・留守番の父に燗焼いてをり

・鎌たたむ朝日の中の枯蝸螂

◎川村耕泉氏『淡雪』 ご高齢ながら第二句集の上梓に敬意を表したい。自分史であるという「俳句生活」の中から生まれた一句一句は、平明であり説明を要しない。特に家族愛に満ちた作品が多く、人生の節目ごとの作者像が浮かぶ。

・月山の水を携へ受験の子

・花筏ゆるりと真鯉崩しゆく

◎山野井よし子氏『小さき歩』 作者が五十年に及ぶ俳句生活の中から生まれた三千余句の多作の足跡は、正に「継続は力なり」である。そして、厳選された七百余句は、日常の生活に根ざした句が多く、やはり、平明に自在に季節の流れを詠んでいる。

・ふきのたう摘めば命に触れしごと

・白といふ色と向き合ふ筆始

判定は、全委員の公正なる選考と多数決により、準賞に八柳悦子氏の『亀ヶ崎にて』を推薦。今後も諸氏の更なる研鑽と健吟の程を念じ、鈴木正子協会長の賛同を得て「準賞」に決定した次第である。

第一回山形県20句競詠俳句賞

大賞 「黒川能」 伊藤 厚子
 優秀賞 「どんづき唄」 木村 慶子

選考を終えて

伊藤 寛

はじめに、今回の結果発表は、第一回ということ、このように大きく取り扱うことになったことをお断りしておく。

募集には、当初の予想をはるかに越える六十九編の応募があった。新たな賞への期待の表れと、選考委員一同うれしく思う。

数多くの応募をいただいた一因として、俳句をまとめ、それに題をつけて発表してみたいという潜在的な欲求が、会員の中に高まりつつあったのではないか。

だとすれば、この賞がその二ーズに応えられたことは、選考委員にとって大きな喜びである。この賞が今後、会員の個人句集の発行を促すような流れになればと期待する。

大賞、優秀賞、入選合わせて十八編は、八人の委員の点盛によって決定した。六十九編の中から、それぞれが十編を選び、最高点を十点とし、次が九点、以下順に点数を付けた。

集計の結果、大賞に伊藤厚子氏の「黒川能」が、優秀賞に木村慶子氏の「どんづき唄」が選ばれた。

大賞、優秀賞ともに、二十句の制限の中で、句材を選び、視点を定め、丁寧に詠み進めたことで、表現に工夫と深みが出たように思う。

二十句にふさわしい題材とか、作りやすい題材があるのだろうか。いずれにしても、限られた二十句の中で、いかに多様な詠み方をするかがポイントであろう。次回応募するときも、この点を考慮し、それぞれ作戦を立てていただきたい。

さて、「鷹」主宰であった藤田湘子は、発想の似た句を作らないよう、「俳句メガネ」を外せと教えたという。

残念ながら、応募作の中には「俳句メガネ」をかけて作った俳句が少なくなかった。どんな俳句かといえば、形はできているが中身の空虚な俳句のことである。

俳句は型の文芸である。型を生かす文芸である。しかし、型に嵌められてはならないということであろう。肝に銘じたい。惜しくも選から漏れた五十一編の中から、目にとまった句を上げさせてもらう(順不同)。どの句も飾らずに詠まれている、俳句に無理をさせない、好感の持てる作品である。

弓道着姿一列梅開く

鈴木 あい

桐の花香りて婚の整へり

竹田 朝子

裸木となりて高層ビル浮かぶ

大森 アキ

十葉を干して一つ家三世代

猪股 洋子

リズム良き軒端雫や冬うらら

堀野カヅ子

賀状受く昭和九十五年かな

菊池みさ子

滴りの未だにつづく戦後かな

中鉢 時雨

日帰りのバスを仕立てて女正月

小島 緑泉

一人居の媪すこやか黄水仙

岸 好子

沢水の激しき音や山開

鈴木 周子

コロナ禍により、県内外の俳句大会や句会が次々と取りやめになる中、作句、投句の機会が減っているのではと懸念する。このような時こそ、20句俳句賞に応募していただき、俳句への意欲を保ちつつ、ストレスやフラストレーションを解消してほしい。

この賞が、回を重ね充実していくことが、私たちの俳句のレベルアップに役立つものと確信する。

20句競詠俳句賞選考委員感想

実力向上に繋がる二十句

阿部月山子

令和元年度は、「山形県20句競詠俳句賞」が新設実施された記念すべき年となった。短期間での取り纏めと選句であったので事務局の方や選者は大変だったと思う。そして、予想も

しなかった「新型コロナウイルス」の世界的流行で、多くの行事を中止せざるを得なくなる事態だったのである。事務局と選者の努力で二十句競詠が実施されて、六十九篇の多数の作品が集まり、会員の熱意に感動させられたのでした。

第一回の大賞は伊藤厚子さんの「黒川能」で、優秀賞は、木村慶子さんの「どんづき唄」で、どちらの作品も、群を抜く作品で、多くの選者から高い評価を得ています。

時間の短縮のために原稿をコピーで配布したが、読みにくい原稿は損をしますので綺麗に書きましょう。二十句を纏めることは、俳句の実力向上に繋がるので、ぜひ、これからも、この企画を継続してほしいと思う。

競詠の審査を終えて

鈴木 正子

初めての試みの、二十句競詠の審査を緊張の中終えることが出来ました。応募数など不安はありましたが思いの他多く、七十余名の参加者に改めて、作句力と熱意とチャレンジ精神に敬意を表したいと思います。各自の作品は多様でとても読みごたえがあり、選考委員と共に大変勉強させて頂きました。選は一作品ずつに丸印をつけ最終的に持ち点を加え、その結果、一位に「黒川能」。一連の吟行句とし何度か足を運び、立ち位置をしっかりと描写され力量の確かさを評価しました。二位は、「しな織の里」。場所を一つに絞り風土豊かに杣人の

動きをリアルに捉えられました。次に「どんづき唄」、「秋を詠む」、「喜寿の春」を推しました。

次年度の開催も予定しておりますので、更なる向上を目指し挑戦して下さいますようお願いしたいと思います。コロナ禍の自粛が続きますが、平穩無事の自然を愛でる日を心より願っております。

俳句のある風景

黒坂 重政

令和元年度にふさわしく、県俳人協会初の企画事業である「第一回20句競詠賞」。応募総数は予想を上回り六十九編、各選考委員ごとに優れた作品十編を選考することとなった。結果、全会員周知の通り、十八作品入賞が決定した次第である。以下、印象に残った作品（大賞・優秀賞を除く）を入選作より抽出する。着想、表現等の細い分析はさておき、総じて作風は安定している。

・ 秋を詠む（渡辺幸則さん）まとまりのある秋季雑詠。
立秋を知らされ望む遠蔵王

・ 高田松原（猪俣とみをさん）社会性俳句に昇華。

一本の命守らむ松手入

・ あみだ籤（木村比紗子さん）日常の自分史の結晶。
除夜の鐘まだ先のあるあみだ籤

大成功!!

小野 誠一

「山形県20句競詠俳句賞」のイベントが決まり、選者を仰せつかりました。反響は大きく会員の熱意に感動しました。応募作品集六十九編予想以上の結果で本当におどろきました。私の選考について感想を申しあげます。

私は常日頃、俳句の命は季語であると思っております。先づ全体的な印象から約半数に絞り込み、何日かかけてやっと十編を選びました。第一位は「黒川能」、私以外にお二人の選も第一位でわが意を得たりでした。「黒川能」は連作。落ち入り易い自己類想がない・生きてる季語・文語文法の用法が適切・句意明解、辞書不要な作品でした。

凍道の案内の訛やはらかし
第一句に置き心憎いほどの構成でした。二・三・十回と協会の名物行事として、歴史を重ねてゆけるよう期待をします。

第一回20句俳句賞の選考に当って

工藤 稲邨

始めに今回の競詠俳句賞に六十九名の皆さんに御参加いただき感謝申し上げます。二十句をまとめるには、色々の条件もあり大変だったと思います。総投句数にしますと一三八〇

句になりました。一句一句篤と鑑賞させていただきました。それぞれに作者の心魂が込められている句ばかりでした。入賞された皆様には誠にありがとうございます。

今後、この20句俳句賞が県俳人協会の皆様のご協力により益々充実発展することを祈っています。

私が特に共鳴した句を御紹介いたします。

雨上りちちろ鳴き交ふ仕舞風呂

高橋喜恵子

草笛や師の一言を今もなほ

石井 浩吉

夕暮れは故郷恋し木守柿

山口 恵子

終活の話も絶へてちちろ鳴く

渡辺 幸則

初音聴く般若心経唱へつつ

岸 好子

公平な評価を目指して

後藤 貞義

県俳人協会初の試みである20句競詠俳句賞の選考に当たり、六十九人もの応募があり、最初に驚かされました。

初回と言うこともあり、明確な評価基準はなく、例えば、着想、文法、季語、助詞、切れ字等の使い方が適切かどうかの観点を評価できる基準を設けていただければ、比較的公平が保たれ、総合的な判断が可能ではないかと思われました。

私は俳諧の二文字への意識が強く、滑稽さが内在し、人の心を和せることが妙に好きです。選句に当たっても、その方向に自然と傾いているような気がします。

さて、大賞の「黒川能」は、タイトルに特化した句であるが、題目がないと理解できない句もあった。総じて表現が巧みであるが、もつと深いところを抉って欲しかった。

大賞には至らなかつたが、入選の「牡丹雪」は、心象的な句が多く、主観も入り、秀句が多く高く評価したい。

感想

金子つとむ

「どんづき唄」は昔からの習俗が残る羽黒郷の子供たちの一年間を詠んでいる。どんづき、山菜採り、謡のけいこ、盆歌舞伎など多彩な活動を通して地域と学校と一緒に子供の成長を見守る、やさしい教育者の目が感じられる。

「黒川能」黒川能はすでに多くの人が詠んでいるテーマである。この作品を読み、大人から子供まで村を挙げての行事にはさまざまな視点があることを知った。近年暖冬が続いているが、作者には吹雪の日の黒川能もぜひ見てもらいたい。

「熱帯夜」はおそらく作者初のインド旅行の連作。日本とあまりにも違う風物に接した時の驚きや思いが新鮮に詠まれている。

以上の三篇ともテーマが一貫しており、選者に訴えるものが強い。二十句の中におもしろい句が二三あつても、二十句全体から感じられるものを大事に選びました。

第一回山形県

20句競詠俳句賞入選

大賞	「黒川能」	伊藤 厚子
優秀賞	「どんつき唄」	木村 慶子
入選	「喜寿の春」	石井 浩吉
〃	「熱帯夜―インドにて―」	佐治よし子
〃	「秋を詠む」	渡辺 幸則
〃	「高田松原」	猪俣とみを
〃	「四季点描」	折原 廣子
〃	「あみだ籤」	木村比紗子
〃	「しな織の里(関川)」	佐藤 栄美
〃	「牡丹雪」	小林香代子
〃	「新米ぞ」	牧 静
〃	「母なる大河」	齋藤 眞人
〃	「月の舟」	金谷ゆかり
〃	「菊花展」	高橋喜恵子
〃	「語り部」	齋藤 峯男
〃	「歳惜しむ」	山口 恵子
〃	「雛のこと」	木嶋 玲子
〃	「水音」	佐藤権一郎

大賞作品

「黒川能」

凍道の案内の訛やはらかし
よりしろを結ぶ当屋の冴えにけり
声高く稚児の白足袋踏む大地
雪焼の手より鈴鳴る三番叟
小面の唐織の綺羅春近し
直面の眼りりしき王祇祭
中入や朱椀に香る凍豆腐
寒灯の厨忙しき割烹着
寒暁へ継ぐ燼燭の一貫匁
朗らうと寒夜徹する能舞台
黒川能五百余年を継ぎて来ぬ
湯たんぼの包む仮寝の安けさよ
産土のごとき朝餉の棒鱈煮
黒川の鎮守の社草萌ゆる
冴返る殿に太夫の肖像画
三月の琴の始むる神事かな
春耕の鋤打つしぐさ神の前
早舞の瓔珞ひかる祈年祭
帰るさの白鳥群るる田一枚
露の臺のみなざる畦や能の里

伊藤 厚子

優秀賞作品

「どんづき唄」

木村 慶子

金峯山笑ひ初めの校歌かな
 名を呼べば返事をちこちチューリップ
 ひとりづつ切符を買って遠足日
 梅雨晴や切らるる木木に浄め酒
 母校祝ぐどんづき唄や青田風
 夏空へ子どもどんづき声張れり
 赤子背にどんづき囃す日傘かな
 木の校舎みがいて別れソーダ水
 山のもの摘んでみそ汁子のキャンブ
 年嵩の小声の合図目高追ふ
 転校と知りし下駄箱みんみ蟬
 四海波さらふ少女ら涼新た
 袴の紋は校章文化祭
 ひらがなのしこ名に沸けり草相撲
 おひねりの子役に飛んで盆歌舞伎
 秋澄むや加茂坂越ゆる竿の列
 先生も影踏みななま木の実落つ
 スキーの子たちまち湯気の子となりぬ
 校庭に雪割る響き羽黒郷
 涙目の絵羽織あまた卒業歌

第43回通常総会書面表決
結果報告

会 員 数	376
回 答	261
賛 成	259
反 対	1
無 効	1
会長委任	115

よって、令和2年度山形県俳人協会の議事は可決承認されました。ここにご報告いたします。

大賞作品

